

土木工学・建築学委員会 気候変動と国土分科会
佐賀低平地への適応策実装検討小委員会（第25期 第5回）
議事要旨

■日時 令和5年9月19日（火曜日）14時00分～16時00分

■場所 遠隔会議

■参加者 荒牧、池田、大原、小松、望月、山本（五十音順、敬称略）

オブザーバー 寺尾国土交通省武雄河川事務所長、仁戸田佐賀県県土整備部河川砂防課課長
（代理：森山）、他

■議事概要

（1）前回の議事概要について

・望月委員長が前回の議事概要を説明。

（2）流域治水の最近の状況について

・寺尾所長が流域治水の最近の状況について説明。

（3）見解「気候変動に伴う水災害の頻発化・激甚化に対応して、今、科学・技術に求められるもの～将来の市街地土地利用のために～」について

・望月委員長が見解について説明。

（4）記録「流域治水に資する建築物の耐水設計検討小委員会の活動の記録」について

・望月委員長が記録について説明。

（5）意見交換

・議題（2）、（3）、（4）に関し、意見交換。主な内容は以下のとおり。

（6）その他

・特になし

■流域治水の最近の状況に関する説明と意見交換の主な内容

（六角川における流域治水の現状及び推進のポイント等）

・令和5年3月に六角川上流を特定都市河川浸水被害対策法に基づく特定都市河川に指定。

・流域水害対策協議会を設置済。今後、流域水害対策計画を策定予定。

・流域治水推進のポイントは3つ。①流域のあらゆる関係者が協働して水災害対策を自分事として捉えること、②対策を実施するにあたり地域の理解が必要不可欠であること、③行政以外の河川協力団体等の代弁者による地域の意識や行動を変容させるような情報展開が必要であること。

・現在、地域の区長に対策の必要性を説明中。併せてシンポジウムや国交省以外のNPOに普及活動をやってもらえるよう関係者にアクセス中。

（流域治水の実効性を高めるために）

・住まい方の工夫だけでなく、農業を含む産業のやり方の工夫も必要。

・農業など他分野にとって何が課題で何をしようとしているのかという情報を把握し、相手の立場に立って考えること、社会全体を見ることが必要。

・住宅への支援制度などについて、どのような支援制度があり、支援を受けるための要件（浸水深が軽減されたらどうなるのかといった点も含め）や補助率などを整理しておく必要。

- ・平成3年8月洪水は長雨。長雨であるがゆえに留意すべき点について把握に努める必要。
- ・地域が理解し自分事として捉えて協力していくには、長期にわたって取り組みを継続させ、行政と地域住民の信頼関係を構築していくことが重要。
- ・協議会が多数設置されている。統合化など有り方の検討とともに参加者や運営方法を工夫する必要。
- ・「長崎街道より低いところに家を建てるな」といった言い伝えを活用しつつ、こうした在来知とシミュレーションモデルなどによる現在の科学的な知見を組み合わせる理解を深めるという手法も有効。
- ・歴史的に遡ってみて、浸水との関係で、住む場所がどう変わってきたか、どこに工業立地がなされたか、といった視点で検証することも必要。

■見解「気候変動に伴う水災害の頻発化・激甚化に対応して、今、科学・技術に求められるもの～将来の市街地土地利用のために～」、記録「流域治水に資する建築物の耐水設計検討小委員会の活動の記録」に関する意見交換の主な内容

(見解、記録に関するコメント)

- ・見解に記載の「地形特性による豪雨の発生しやすさの明示」は非常に大事。直近6年間で6回浸水した久留米市も地形が効いている。
- ・移転・移住が最終的な解決策になると思うが、悲観的な受け止め方となることは免れない。そこに住み続けたい人に対しては耐水住宅という解決策は準備されることになるのだが。
- ・一方、社会の有り方という点では、お互いに助け合うような社会とならなければ対処できない。こうした社会の実現を迫られることに。
- ・移転をしないといけないところと住み続けるところを科学・技術の観点から提示せざるを得ないのでは。オールオアナッシングではなく、住むための様々な条件をはっきりさせるような細かい工夫が必要。まだ制度設計ができていないが、一人一人に考えていただく上で必要な情報を研究者が出していくことが大事。
- ・進めていく中で具体の課題が出て施策展開に繋がるという流れを作らないといけない。
- ・この見解の内容を広める方策を検討する必要。
- ・住宅の耐水設計について強制力を持たせる必要もあるのではないか。
- ・シンポジウム「水害対策と建築分野の取組み」で使われた資料、図表など、多くの方が理解しやすいものを公開できれば地域の理解を深める道具だてが揃うので、そういう方向で進めたい。

■その他

- ・第25期の小委員会は9月で終了するが、現地での課題等が把握でき、大いに成果を挙げることができた。感謝する次第。

—以上—